

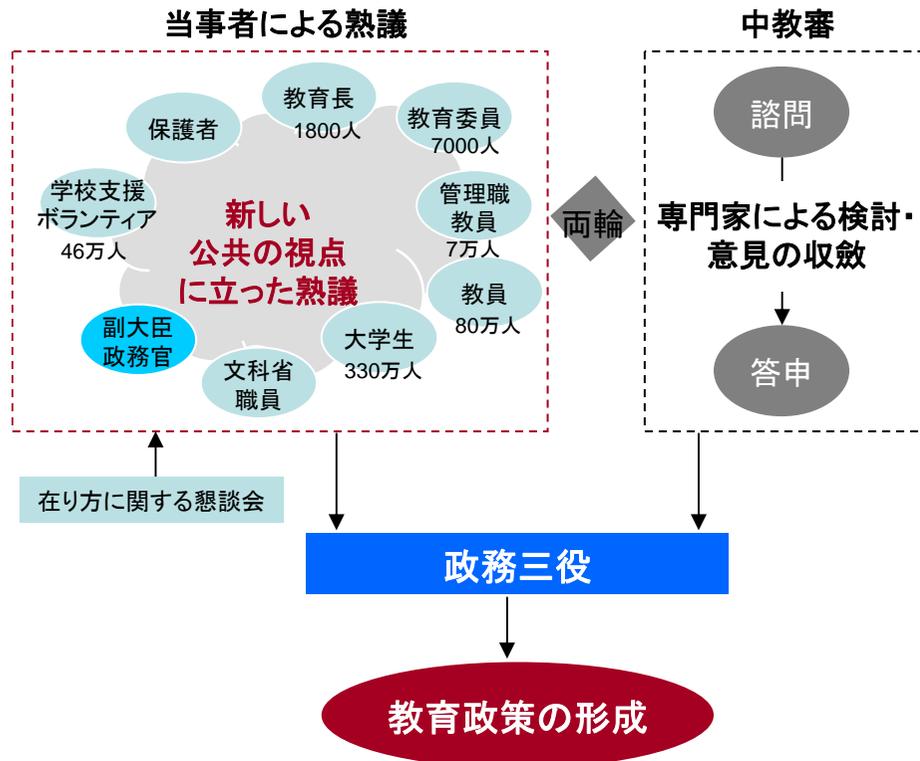


# 文部科学省 < 熟議 > に基づく政策形成の新基軸

2010.4.9  
鈴木 寛

文部科学省に、『「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会』（金子郁容座長）を設置し、現場対話とインターネット活用等による「熟議（じゅくぎ）」によって教育政策を形成することに資する方策を検討中

## 文科省 熟議による教育政策形成構想



## 文科省 熟議の具体的展開イメージ



- ✓ 教育現場の当事者と政務三役が熟議に参加  
現場当事者は希望し、登録すれば参加可能
- ✓ 文科省は熟議を促進する情報提供（事例やデータ）の役とファシリテート役として参加
- ✓ 熟議のプロセスは全てリアルタイムでネット上で公開
- ✓ 扱う教育政策のテーマ例
  - ・学校教育力の向上<教員の質と数・教材>
  - ・大学の在り方
  - ・コミュニティスクール、地域学校支援本部をいかに増やすか
- ✓ 2010年4月17日の「熟議教育シンポジウム（通称）」からスタート

Webサイトでの熟議においては、登録した人が発言可能とし、参加規約を定めるなど、サイトを適切に運営する

### 期待される成果

- 官の独占している意思決定プロセスを教育現場の当事者に開く（官も参加者として「貢献」する）
- 行政が意思決定に果たす役割が変わる（調整と意思決定から、市民参加の創発環境の整備へ）
- 教育現場から、「新しい公共」の場が生まれる

# 文部科学省 < 熟議 > に基づく政策形成の新基軸

じゅくぎ  
熟議

とは【step1】個々人の本音をぶつけ合い共通課題を発見していく

【step2】共通課題について関係者それぞれの立場や役割を相互理解する

【step3】それぞれが当事者意識を持って議論に関わることによって共通課題についての解決方法を編集・創造する

【step4】ボランタリーに改革アクションが始まる

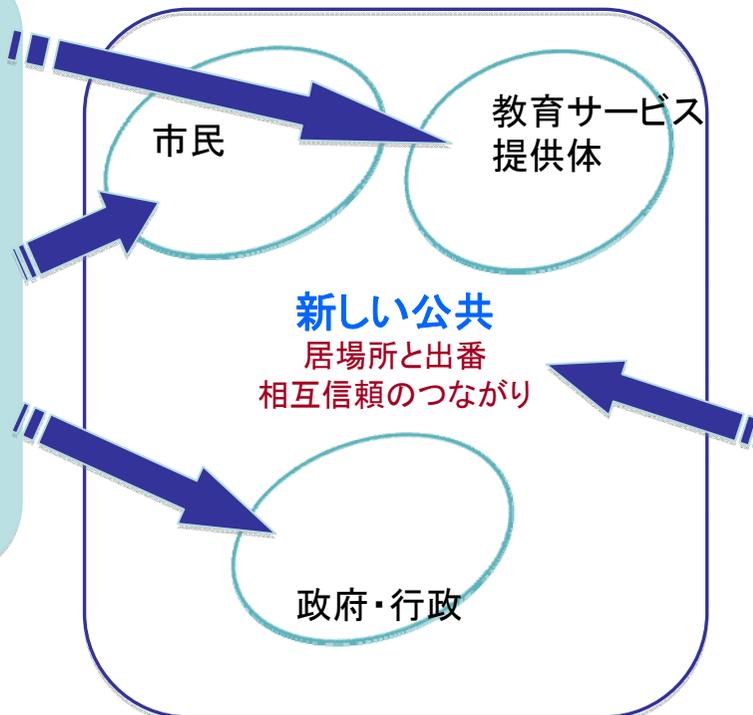
プロセスであり、ツールです。

◆事例：10年前、鹿児島県鹿屋市では地元医師会と県立病院が対立。救急車の市外搬送が多数発生。しかし、県立病院院長と医師会長などの関係者が積極的に熟議の場を開くことによって、問題解決のための画期的なシステムを考案、みんなで実行。今では、高度な治療まで地域内でできるようになった。また、3年前より小児夜間救急のコンビニ受診が増え、医療疲弊が問題となったが、ここでも、医療関係者と母親たちの熟議の場が多数設けられることによって、受診行動の適正化と診療の質向上につながった。

## ◎効果1:行政改革

教育についての情報と議論が市民に広く開放される。

行政が教育政策についての情報提供と熟議のファシリテーションをおこなうことで、市民と共に教育政策を考えることができ、現場と行政の間にある問題認識のギャップを縮小することにつながる。社会課題ベースの議論ができるので、「縦割り、横割り」行政を乗り越えた政策形成につながる。それによって、教育現場における社会課題について、迅速で効率的な対応が可能となる。



## ◎効果2:新しい教育文化の創造

正しく潤沢な情報のもと、色々な関係者が本音をぶつけ合い、課題を認識。そして、課題解決に向けて徹底的に議論することにより、社会的合意を編集・創造する。

これらのプロセスを通じて、「市民一人ひとりが教育の担い手として当事者意識を持って教育に関わり、良い教育、良い社会を創る」という市民文化を醸成していく。

それぞれの地域で、教育を考えるための「リアル熟議」が開かれるようになることで、市民が居場所と出番を確認できるようになる。また、地域のつながりが形成される。